

J. R. R. トールキンの命名法

島居 佳江

1. はじめに

J. R. R. Tolkien の命名法は彼自身の趣味、嗜好と相まって非常に特徴的である。トールキンにとって名前を考えることが第一義で、物語の創作はそれら名前や他の創造言語に活躍の場を与えるにすぎなかった。そのようなトールキンが敢えて名前を与えていない登場人物がいる。1967年に発表されたトールキン存命中最後の出版である『星を飲んだかじや』(*Smith of Wootton Major*)の主人公はかじや(Smith)であり、一般名詞が固有名詞として名前に使われている。また、かじやは父親を除き、先祖に関する情報も持たない。『星を飲んだかじや』が削ぎ落とした特質から、トールキンが人生の最晩年で達した境地について考察したい。

2. 『星を飲んだかじや』の特殊性

『星を飲んだかじや』が発表されたとき、世間は『指輪物語』の作者による作品だと期待した。Fliegerが、発刊当時の書評をまとめているが、一部を除き評判は芳しくない。『指輪物語』のファンがその同じ興奮を期待して読むと、これらの批判に一票を投じたくなるのも無理はないだろう。しかしながら『星を飲んだかじや』はトールキン晩年の心境を理解するために極めて示唆に富む作品なのである。

伝記作家 Carpenterによると、トールキンは、George MacDonald の *The Golden Key* の序文を書くように依頼され、珍しく引き受けた。しかし、彼の著作の多くはトールキンからすれば、道徳的な寓意性によって損なわれていると思われた。トールキンはそこで、マクドナルドの読者に対して「妖精」という語の意味を説明することから始め、その説明のための物語が『星を飲んだかじや』だったのだ(244)。

主人公の少年には名前がなく、かじやと呼ばれている。奇妙なことに、かじや以外の登場人物には名前がある。かじやは、トールキンが描く登場キャラクターによく見られる権威や血統とは全く無縁である。これまで挙げてきた『星を飲んだかじや』の特殊性を、他作品と比べることでより明らかにしたい。

3. トールキンの私製言語と命名法 ‘nomenclature’

トールキンの命名法に関するこだわりには年季が入っている。子どもの頃から命名法の基となる私製言語を作り、さらにそれを発展させ一定の組織立った原則を持つ言語の発明まで試みていた(Carpenter 50-51)。トールキンはいくつもの言語を考案し、それら言語相互の込み入った関係と言語の系統樹の推敲に心を奪われていた(116-117)。トールキンにとって、こういった言語を生み出すことがまず先で、物語の創作は私製言語に活躍の場を与えるためだと本人が書き残している。そのような性向のトールキンが物語の登場キャラクターへの命名とそれに伴う言語学的な作業に大きな関心を持っていたのは想像に難くない。こういった特徴は、作家が本業ではなく、文献学者(philologist)としての趣味が高じたトールキン独特の執筆スタイルと言える。トールキンにとっては私製言語が先で、命名も私製言語に由来し、作品内つまりトールキンの創造する世界でのみ意味が通じる。故に「名前がない」こともトールキンのこだわりの結果で、一つの着地点だと考えられるのである。

4. 家系図 ‘family tree’

トールキンの命名法は登場キャラクター間、家族、祖先また特定の時や場所に関連する。家系図の名前とトールキンの専門である言語学的関心との類似は明らかである。*The Lord of the Rings* の巻末に、Dwarves, Hobbits, そして Men の年表及び家系図が紹介されている Appendices A, B, C は、ページ数にして74ページにも及ぶ。Hobbits の家系図の最初に “The names given in these Trees are only a selection from many.” (1099) とあるように、これらに入りきれなかった物語背後の情報はまとめると数冊分の本になる。トールキンは自らの楽しみの一つとして、自分が創造したキャラクターに膨大で相互に入り組んだ個々の情報を与え、それらはキャラクター達の特質を決定付ける要素ともなり得た。ところが、『星を飲んだかじや』の主人公、かじやにはそれがない。かじやの父親についての簡単なメモは残されているが、一代遡るに過ぎない。次節からは、『星を飲んだかじや』で、トールキンが職業病のように拘った命名法や家系図を封印した理由を考察していきたい。

5. 「妖精の愛」を説明するための物語

5-1 執着を捨てる

トールキンは『星を飲んだかじや』について解説した自身のエッセイで「妖精の愛は、愛の愛であり、それは愛と尊敬で、所有や占有ではない」(131)と説明する。トールキンは「妖精の愛」について考察を深める中でこの結論に至った。命名法や家系図と共に捨てたものは‘the spirit of possession and domination’「所有と占有」と言えまいか。

トールキンは『星を飲んだかじや』で「妖精の愛」を説明するために、一番大切なことを改めて考え、それ以外の物を削ぎ落としていったのではないか。かじやは「正しい意図」で、妖精の星を自分の直系にではなく、嫌われ者ノークスの孫に譲渡を決める。トールキンは、かじやに執着を捨てるように導いたが、これは作者自信を投影しているのではないだろうか。

5-2 こだわりを手放す – *Leaf by Niggle*

命名法や家系図はニグルの木の葉とも言えるのではないか。カーペンターによると『ニグルの木の葉』(*Leaf by Niggle*)はトールキン自身が「完全に行きづまった」と認めたある朝、目覚めると頭の中に一つの短い物語があり、それを走り書きして、この世に産まれた作品である。トールキンはいくつもの完全へ固執し、疲弊し、ついには何ひとつ達成できなくなるのではないかと恐れていた。トールキンはこの中で、自分の神話の「木」に対する最悪の恐れ、主人公ニグルのごとく、仕事が完成するずっと前に、この世界から去らねばならないのではないか、を表現した。『ニグルの木の葉』は非常にアレゴリカルな作品である。トールキンはニグル同様、葉というこだわりを手放し、木全体を描きたいと考えていたに違いない。

5-3 カトリシズムから遠去かる

トールキンが描く「妖精の愛」は人間によって線引きされた宗派を超え、人間が作った儀式、典礼に関係のない深い真実の神の愛を表現しようとしたのではないだろうか。トールキンは、敬虔なカトリック信者だった。「トールキン作品に見る sacrament のシンボリズム」で、カトリシズムの重要な sacrament のシンボリズムがトールキンの主要作品中に豊かに書き込まれていることを例証した。しかしながら、トールキンは晩年、カトリック改革の波に翻弄される。『星を飲んだかじや』は、ちょうど第二バチカン公会議が終わった後、様々な変更の公布がなされている頃に発刊された。トールキンは心から愛していた sacrament を、心から信頼していたローマカトリック教会に改められるという大きな矛盾に直面した。ローマカトリック教会はそれまでの主張を変え、トールキンにとってそれは裏切りに等しいことだった。そのような状況でトールキンの描きたいと望む妖精物語はカトリシズムから離れ純粋な愛に舵を切る。その愛もカトリシズムが提唱する儀式、典礼などに縛られない、ただ神を見上げるという姿勢に到達している。以前の作品にふんだんに盛り込まれた sacrament のシンボリズムは『星を飲んだかじや』に、もはや見られない。それが、カトリシズムから離れ、「妖精の愛」が表現するものではないだろうか。

6. おわりに

命名法や家系図に強い拘りを持つトールキンが名前をつけないという選択に込めた意味を考察した。トールキンは命名法や家系図とともに執着や拘りを捨てたのではないだろうか。その執着に、一部のカトリシズムが含まれている可能性を当時のカトリック情勢やトールキンの書簡に探った。トールキンが説明しようとした「妖精の愛」は、宗派や儀式、礼典などの垣根を越え、神の愛の核心だったのではないだろうか。

引用文献

- Carpenter, Humphrey. *J. R. R. Tolkien: A Biography*. HarperCollins, 2011.;カーペンター, ハンプリー.
『J. R. R. トールキン 或る伝記』菅原啓州訳, 評論社, 1982.
Tolkien, J. R. R. *Smith of Wootton Major*. Edited by Verlyn Flieger, HarperCollins Publishers, 2005.
----- *The Letters of J. R. R. Tolkien*. Edited by Humphrey Carpenter and Christopher Tolkien, HarperCollins Publishers, 1981.
----- *The Lord of the Rings*. Harper Collins Publishers, 2005.
----- *Tree and Leaf*. Harper Collins Publishers, 2001.; トールキン, J. R. R. 『妖精物語について』猪熊葉子訳, 評論社, 2003.
島居佳江. 「トールキン作品に見る sacrament のシンボリズム」日本比較学会比較文化研究中国・四国支部 140 号, pp. 133-144.